

18	豊田	猿投中学校	クラチ コウヘイ
			氏名 倉知 浩平
分科会番号	1	分科会名	国語教育(作文その他)

研究題目 文章の構成を考え、自他の文章のよさや改善点に気付くことができる生徒の育成

— 1年 「レポートを書く」活動を通して —

研究事項

1 主題設定の理由

本学級は男子16名、女子12名の28名からなる。国語の授業に対して話し合いなどを積極的に行おうとする生徒が多いが、書くことにおいては、段落の役割を意識して文章を書いたり、書いた文章を推敲したりする活動において物足りなく感じることも多い。また、「あなたは書くことが得意ですか」という質問に5割の生徒が「あまり得意ではない」「苦手である」と回答しており、「どちらかといえば得意だ」と回答した生徒の中にも「感想などを書くのは好きだが、段落などを分けて書くのは苦手」「書きたいことは思いつくが、どうやって書けばいいかわからないことがある」といった回答をする生徒もあり、多くの生徒が論理的な文章を書くことに苦手意識を持っている。

一方で、「友達からアドバイスを貰い、自分の文章を改善する」という活動に対しては9割以上の生徒が「得意だ」「どちらかといえば得意だ」と回答しており、文章の構成方法を学習し、自身が書いた文章の構成や展開に対して、適切な助言を生徒同士で行うことができれば、段落の役割を意識した文章を書くことができるようになり、書くことへの苦手意識を取り除くことができるのではないかと考えた。

また、新学習指導要領において、中学1年生の「書くこと」では、「**イ 書く内容の中心が明確になるように、段落の役割などを意識して文章の構成や展開を考えること**」、「**オ 根拠の明確さなどについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと**」とある。これらのことを踏まえて目的に応じて文章の構成や展開を考え、協働的な活動の中で自他の文章のよさや改善点に気付くことができる生徒を育てたいと考えた。

2 研究の仮説と手立て

(1)めざす生徒像

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 文章の構成や展開を考えることができる生徒 ② 仲間との協働的な活動の中で自他の文章のよさや改善点に気付く生徒 |
|---|

(2)研究の仮説

仮説1 段落のもつ役割を明確にし、内容のまとめりごとに整理をすることができれば、文章の構成や展開を考えることができるだろう。

仮説2 仲間と根拠の明確さや構成について交流し、助言をしあうことができれば、自他の文章のよさや改善点に気付くことができるだろう。

(3)仮説に対する手立て

<仮説1に対する手立て>

①レポートのモデルを示す

単元の導入から、作成するレポートのモデルをあらかじめ生徒に示し、段落の構成・展開、説得力のある文章にするための観点を示すことで、生徒自身が内容のまとめりで情報を整理できるようにする。

②思考ツールの活用

物事を複数の視点で捉え、整理するための思考ツールである「くまでチャート」を用いて、調査結果などの情報をまとめりごとに整理することで、段落の役割を意識した構成や展開を考えられるようにする。

<仮説2に対する手立て>

③構成会議の実施

構成メモをもとにした構成会議を実施し、他者の構成や根拠の明確さなどについて、良い点や改善点を伝え合うことで、自身の文章の推敲のための観点を身に付けることができるようにする。

(4)抽出生徒について

抽出生徒	生徒の実態	教師の願い
A子	授業に対して意欲的に臨むことができる。しかし、書くことに対しては苦手意識をもっており、アンケートでは「書きたいことはあるけれど、どうやって書けばいいかわからない」と回答している。	段落ごとに情報を整理することで、段落の役割を意識した構成を考え、根拠を明確にした文章を書けるようになってほしい。

(5)単元構想(4 時間完了)

時	学習活動	教師の指導・支援
1	<p>1 学習の見通しをもつ。</p> <p>○中学生について調査したレポートの例を見て、単元の最後には調査を基にしたレポートである「猿中白書」を作成することを知る。</p>	<p>・今後の活動の参考になるように、資料や調査の例と、調査内容を根拠として書かれたレポートの例を提示する。(手立て①)</p>
2	<p>2 中学生について調査をし、根拠となるデータを整理する。</p> <p>○中学生について調査したいことを考え、課題を決める。</p> <p>○課題についての仮説を立て、証明するための質問を考える。</p> <p>○調査結果を整理する。</p>	<p>・情報を比較・検討して必要な情報を絞り込むために、くまでチャートを用意し、調査結果を観点ごとに整理する。(手立て②)</p> <p>・自分の考えの説得力を高めるために、仮説の根拠となる情報や調査結果を取捨選択するよう伝える。</p>
3	<p>3 構成会議を行う</p> <p>○整理したデータを基に、レポートに書く内容を決め、構成を考える。</p> <p>○構成メモを班で読み合う構成会議を行い、よい点や改善点を伝え合う。</p>	<p>・構成について適切な助言ができるように、説得力のある文章の観点をあらかじめ示しておく。</p> <p>・貰った助言を整理できるように、2色の付箋により点と改善点を書くよう伝える。(手立て③)</p>
4	<p>4 レポートを書く</p> <p>○構成メモと構成会議での助言を基に、レポートを書く。</p> <p>○書いたレポートを推敲する。</p> <p>○完成した「猿中白書」を読み、気付いたことをまとめる。</p>	<p>・レポートを自身で推敲するために、構成会議で示した観点を確認させる。</p>

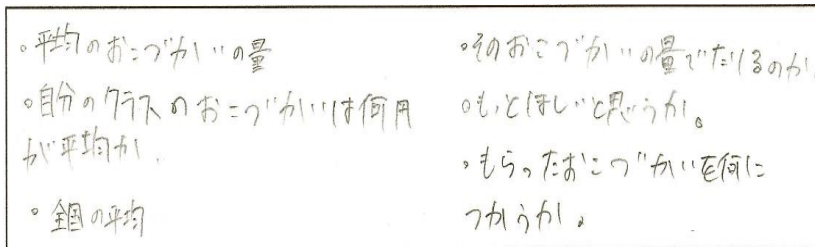
3 研究の実際 (結果と考察)

(1) 作成するレポートのモデルを示す (仮説 1—手立て①)

まず、単元の導入の授業では、中学生白書の Web 版 (資料 1) を見せて、自分たちの生活について行われている調査をとらえた。また、その後中学生白書を基に作成された中学生の生活時間についてのレポート (資料 2) を読み、「根拠を基にして意見を述べること」「項目を分けて記述すること」「自分の考えをまとめる」などのレポート作成に必要な観点到気付くことができた。また、本単元では各自で中学生について調査したデータを基にして、レポートを作成し、

「猿中白書」としてまとめることがゴールだと伝えた。Aの振り返りには、「レポートは何を書けばいいかわからなかったが、アンケートなどをして根拠を集めればいいと分かった。いろいろな調査をしてレポートを書きたい。」とあり、学習に前向きな気持ちをもつことができた。

レポートのモデルを示したことで生徒たちは調査の方法に共通しを持ち、資料3にあるように、積極的に調査項目を考え、アンケートや資料集めに臨むことができた。また、友人同士でアンケートの項目について話し合ったり、資料の情報を共有したりする姿も見ることができた。



資料3 Aが書きだした調査内容（ワークシートより抜粋）

(2) 思考ツールの活用（仮説1—手立て②）

タブレットを使用して集めた資料や、Microsoft Formsを活用して自分で作成したアンケートの結果を「くまでチャート」を用いて整理させた。アンケートなどの調査内容を項目ごとにまとめ直すことで、レポートを記入しやすいようにするためである。

Aはアンケートでクラスメイトに質問した、「1か月のお小遣いは何円か」「もらったお小遣いの使い道は」の結果をそれぞれ整理し、全国の中学生のデータを整理したものと並べてくまでチャートに記入した。自分で収集したデータと、全国平均のデータを比較・検討し、「全国平均のデータと比べると、お小遣いの量は少ない。貰わない人がある程度いるのは全国のデータと共通している。」ということに気付くことができた。(資料4)

また、Aの振り返りには「集めた情報を項目ごとに整理できた。自分の仮説を支える根拠が3つあると見やすくまとめられた

4. 日常生活について
起床時刻
★2017年度と比較して、起床時刻は17分遅くなっている
【図1】朝はふだん何時頃に起きていますか。(※1)

何かと忙しい最近の中学生だが、規則正しい生活は健康に欠かせない要素である。実際に中学生は、朝何時頃に起床しているのだろうか。
全体の平均起床時刻は6:39となり、2017年度調査結果(平均起床時刻は6:22(※2))よりも17分ほど遅くなっている。一方で、起床時刻が7:30以降の全体の割合は2017年度調査(8.2%)と比較して4.2ポイント減少している。
起床時刻は中学1～3年で7分程度の差動となっているが、就寝時刻の調査では学年が上がるにつれて就寝に遅くなっていくため、高学年になるにつれ睡眠時間が短くなっていくことには留意しておきたい。

資料1 中学生白書 Web版

中学生に選んだ睡眠時間はどれくらいか

1年A組 調査本部

- 課題: 私は1日に9時間眠っているが、7時間の睡眠で平気な人いる。中学生に選んだ睡眠時間はどれくらいが寝るにいい、調べることとした。
- 仮説: 個人差はあるだろうが、中学生に選んだ睡眠時間は8時間程度ではないか。
- 調査の方法: ①統計資料で、全国の中学生の平均睡眠時間を調べた。②1年A組の35名にアンケートを行い、睡眠時間と起床時刻の関係を調べた。
- 調査の結果: ①全国の中学生の平均睡眠時間。平均起床時刻: 6時42分 平均就寝時刻: 22時38分 平均睡眠時間: 8時間4分。『2023年10月 中学生白書 Web版』による。②アンケート調査の結果: 1年A組の睡眠時間の分布(資料1)。平均: 約7時間45分。5分毎(5分単位)が最多(15人・43%)。2年A組の睡眠時間調査: 十分でない: 22人 十分でない: 13人。睡眠時間ごとの起床時刻(資料2)。
- 考察: 全国の中学生の平均睡眠時間は8時間4分、1年A組でも8時間と似た人が最も多く、全体の43%に上った。また、睡眠が「十分でない」と感じる人は睡眠時間が短いほど多く(資料2)。本来必要な睡眠時間が取れていないことが判明できる。8時間以上だと70%以上が「十分である」と答えたことから、中学生には8時間程度の睡眠が適しているのではないか。

資料2 モデル文

情報を活用して説明しよう
集めた情報を記録・整理しよう!!

アンケートやインターネット、書籍で情報を集めて、自分の意見(仮説)を支える根拠にしよう!!

資料4 Aの作成した「くまでチャート」

ので、レポートを書くときに活かしていきたい。」とあり、意見を支える情報を整理し、根拠を明確にすることができた。

項目ごとに整理した情報を基にしてレポートの下書きを行う際にも「くまでチャート」を用いるよう指示をした。生徒たちはモデル文を基にしてそれぞれ「きっかけ」「仮説」「研究の方法」「調査結果」「考察」などの観点を決め、観点ごとにまとめて構成メモを作成することができた。

(3) 構成会議の実施（仮説2—手立て③）

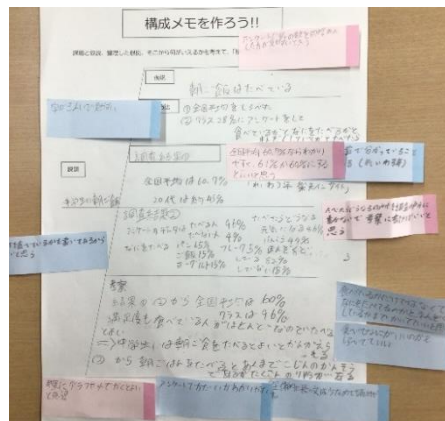
事前に実施したアンケートでは、「文章を書く際に、推敲や見直しを行いますか」という質問に対して、半数以上が「行わない」「あまり行わない」と回答していた。そこでレポートの下書きである構成メモを互いに読み合い、添削しあう構成会議を行うことにした。(資料5)



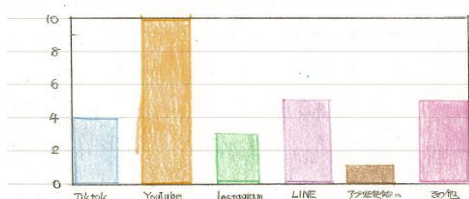
資料5 構成会議を行う様子

構成会議では編集者となって、班のメンバーが書いてきた「猿中白書」の原稿を締め切りに間に合うように修正するという設定を設け、3分間という時間の中でできる限り多くの良い点や助言を行うことを目標とした。Aは調査結果と考察のつながりについて根拠としては弱く感じるなどと助言を書いたり、グラフの数値が具体的なので分かりやすいとモデル文で学習した観点を基に、良い点を書いたりしていた。(資料6)

また、構成会議によってさまざまな構成メモを見た生徒の中からは、「自分の調査が足りていない」「アンケートをもう一度取らせてほしい」などの声上がり、レポートの清書活動へ移る前に追加の調査を行う姿も見られた。Aも、構成会議後の振り返りでは「いろんな構成メモを見たので、どんな構成がわかりやすかったか。他の人の良い点を自分のレポートに活かしたい。」とあり、実際のレポートでは班のメンバーのグラフの色分けを参考にして(資料7)自身のグラフを改善するなど(資料8)、自他協働の活動である構成会議によって、よい構成の観点を身に付けることができた。



資料6 A班で推敲された構成メモ



資料7 Aが参考にしたグラフ



資料8 Aが改善したグラフ

4 まとめと今後の課題

(1) 研究の成果

〈仮説 1 について〉

手立て①によって、生徒たちはレポートの構成や、書く際に注意すべき観点を明確に持ちながら、レポート作成のための調査や構成メモの作成に臨むことができた。A は調査のためのアンケートを作成する際には、どんな情報があれば説得力のある文になるのか、生徒に示したワークシートを確認しながら作業を進めていた。また、単元の振り返りでは「まとめた根拠を組み合わせるとレポートを書くことが楽しかった。情報を整理する力が身に付いたと思う。」と書いていた。構成メモを作る過程では、書くことに苦手意識のある生徒も観点が明確に示されたことにより、根拠に基づいた考察を書くことができていた。

手立て②によって、調査した情報について観点を明確にしながら整理・比較・検証しやすくなったことで、根拠が整理され、説得力のある考察に繋げていく姿が見られた。書くことへの苦手意識が強い生徒に対しては、書く内容を絞り明確化する思考ツールの使用は有効に働くと考える。

これらのことから、仮説 1 に対する手立て①②は概ね有効であったと考える。

〈仮説 2 について〉

手立て③の構成会議を実施し、他の生徒の構成メモを推敲する中で、他者の改善点を指摘するだけでなく、その経験から自身の文の推敲に繋げようとしていた生徒がいたことから、自他協働の課題設定によって文章の推敲の観点を身に付けることができたと考える。

また、構成会議後に調査のやり直しを希望する生徒の姿が見られたことから、自他の文章の比較を通してより良い文章を作成しようという態度を育てることにつながったと考えられる。

このことから、仮説 2 に対する手立て③は概ね有効であったと考える。

(2) 今後の課題

本実践を通して、「書くこと」に苦手意識をもっている生徒も、まとまりのある文章を書く際の観点を身に付け、意欲的に活動に取り組むことができた。加えて、「猿中白書」という明確なゴールがあったこともレポート作成や推敲の意欲につながった。しかし、「書くこと」そのものへの苦手意識の低下や思考ツールの活用について、さらなる手立てが必要であると考える。生徒が書く項目・内容を絞り込み、観点を明確化する点については今回の実践で有効に働いた。一方で、項目が分かれていない論説文や作文の指導の際には今回の「くまでチャート」は有効に働かない可能性がある。様式ごとに有効な思考ツールについてさらなる実践を通して検証していきたい。そしてレポート以外の「書くこと」についての苦手意識の低下をめざしていきたい。

